

四精靈の伝説

1

沢崎 果菜

目次

翼持つもの	1
旅の始まり	40
邂逅	72
炎の扉 I	114
旅の途中・再会	135

翼持つもの

(1)

バートは乗用陸鳥《ヴェクタ》に乗って草原を駆けていた。目の前には若葉色の草原がどこまでも広がっていて、心地良い風が頬に当たる。しかし、乗用陸鳥《ヴェクタ》に乗るバートの顔はこわばっていた。

目的地はまだ見えない。

「……ト。バ……トおっ」

風の音に混じって少女の高い声が耳に届いた。バートは驚いて振り返った。もう一匹の乗用陸鳥《ヴェクタ》が、バートの少し後ろを走っていた。乗っている少女の金色の髪が揺れている。そこから少女は、声を限りにバートの名前を叫んでいた。

バートは自分の乗用陸鳥《ヴェクタ》の速度をゆるめた。少女の乗ったヴェクタがすぐそばまで追いついてきた。

「……何しに来たんだよ」

バートは不機嫌に少女に声をかけた。

「あたしも一緒に行こうと思って。サウスポート」

少女はバートをまっすぐに見つめて言った。サウスポートはピアン王国最南の港町で、今まさにバートが向かおうとしている町である。

「お前が?!」バートは驚いて大声を上げた。

「お前、自分の立場とこれから行くところの状態、わかってるのか? ……ってか、いくらなんでもまずいだろ、お前が動いちゃあ」

「どうしてあたしが動くともまずいのよ」

少女が言い返してきた。

「王女って何のためにいるの？　こういうときのためでしょ。こういうときに動かないで、何が王女よ」

そう言われてしまうと、バートは何も言い返せない。彼女の言葉は筋が通っているようで、どこかしら強引なような。

「それに、お父様の了解はいただいたわ」

と少女は言う。バートはそれはあやしいなと思ったが、バートはどうしてもサウスポートに行かなくてはならない。するとこの少女も当然、ついてくるだろう。ということは、二人でサウスポートに向かうしかない。

「仕方ないな……」

バートは観念してため息をついた。

「ていうか、良く追いついてこれたよな。お前のヴェクタってそんなに速度出るのか？」

「ええ。ピアン王国最速のヴェクタを拝借してきたの」

「良いな。俺もそっち乗って良いか？」

「良いけど、二人乗りになると速度落ちるわよ？」

「ああそっか。じゃあ、このまま行くか」

「……良かった。最初すごい顔してたけど……意外と元気そうだから」

少女はぼつりとつぶやいた。この少女は自分を心配して、王国最速のヴェクタで追いかけてきてくれたのか——と、バートは思った。

*

バートを追いかけてきた少女の名はサラという。年齢は十六歳。とても可愛らしい外見をしているが、こう見えて本格的な体術を叩き込まれており、そこいらのピアン一般兵より強かったりする。今は金髪の長い髪を後ろでくくっており、動きやすい武道着を身に着けていた。

サラはピアン王の一人娘で、ピアン王女ということになる。バートは父親がピアン王に仕える將軍だったため、幼い頃から王宮に出入りしており、サラとは幼なじみの仲だった。

しかし、ピアンの將軍であった父は、数年前のある日突然、姿を消した。誰にも、バートにも妻にも行き先を告げずに。

バートはサラの隣で乗用陸鳥《ヴェクタ》を走らせながら、少しだけ迷っていた。バートはひとりで危険地帯——サウスポートに向かうつもりだった。しかし、ピアン王女であるサラが自分を追いかけてきてしまった。バートとサラは幼なじみでタメ語で話せる仲だが、それでもサラはピアンの王女なのだ。このまま二人で危険地帯に向かつて良いのだろうか。

しかし、サラの武道着姿は、これから向かう先が危険地帯であることを十分に承知している姿だった。例え得体の知れない敵が現われたとしても、バートと一緒に戦って倒して進んでいく、そういう決意の表れなのだろう。だからバートは、サラに対して何も言えなかった。

「……なあ。サラ」

バートはひとつ気になっていたことをサラに聞いてみることにした。

「なあに？ バート」

「……聞いたのか？ あの兵士に」

サラはしばらく口を閉ざした後、「ごめんなさい」とつぶやいた。

「なんで謝るんだよ」

バートとサラはしばらくの間、それ以上は言葉を交わさずヴェクタを進めた。

バートは自分が身につけている剣を確認した。バートの持つ剣はバートくらいの歳の少年が扱うには少々大きすぎる剣だった。しかし、バートは片手で軽々と振り回すことができる。剣は年代ものといった感じで良く手入れされ使い込まれていた。バートはこの剣を五年前の自分の誕生日に父クラヴィスから譲り受けた。十二歳のときだった。

バートは夏生まれの火属性で、火の精霊を自由に扱える——はずだった。しかしバートは昔からこの「精霊の扱い」が苦手だった。戦う力としては、父親譲りの剣技の腕前を持っていたので、特

に精霊を扱うための修業は積んでこなかったのだ。

「でも、バート。せっかくだから、『精霊』も使えたほうが、良い」

バートの父、クラヴィスはそう言った。そして『精霊剣』について教えてくれた。精霊を剣に宿らせる。すると、意識せずとも剣を振るえば精霊の力が発動するのだ。

バートはこの新しい力に夢中になった。毎日剣術と精霊剣の修業を欠かさなかった。父親も良く修業に付き合ってくれた。近所の友人と決闘の真似事なんかも良くした。

一年後。父クラヴィスは突然家を出たきり帰ってこなかった。ピアン王国随一の將軍であつた父が。ピアン王宮は大騒ぎになった。捜索隊も結成されたりしたが、クラヴィスは二度と、ピアン王宮に、バートと母の待つ家には帰ってこなかった。

*

そして今日の昼過ぎのことだった。突然、サウスポートの兵士がピアン王宮に駆け込んできた。兵士の話によると、今朝、サウスポートの町が正体不明の敵の襲撃を受けたのだという。サウスポートはピアン王国最南の町である。ピアンが接している他国はピアンの北に位置する山脈を挟んだキギリス王国だけだ。南の海にしか面していないサウスポートが「襲われる」なんて普通に考えてま
ずありえない話だった。

「正体不明……ってどういうことだ？」

バートはその兵士に尋ねてみた。

「バート様。やつら……、もしかしたら、いえきつと、『人間』ではないと思われます」

「何……だって」

「やつらは背中に赤い翼を生やしていて、自在に空を駆け巡ります。そして、どこからともなく突如出現し、大軍で港町を襲ったのです」

「赤い翼……」

「皆、彼らを『異世界から来た異形の者』と呼んでいます」

「……………」

突然そんな話を聞かされて、バートは言葉を失った。人間ではない者。赤い翼を持つ異形の者。そんなやつらが、どこからともなく突如出現し、大軍で港町を襲った？

「……ひとつ聞いて良いか」

バートは混乱した頭を抱えながら、兵士に尋ねた。

「はい」

「『異形の者』ってのは、わかった。でもなんで『異世界から来た』んだ？ 異世界って……」

「それは……、きっと」

バートの傍らで一緒に話を聞いていたピアン王女サラが口を開いた。

「二千年前の伝説に、なぞらえているのね？」

「そのとおりです」兵士はうなずいた。

*

ここパファック大陸には、二千年前にもこの大陸で同じようなことが起きた、という言い伝えがあった。

二千年前。「異世界」からやってきた、赤い翼を持つ異形の者たちが、パファック大陸を襲撃した。大陸の者たちは苦戦を強いられたが、「四大精霊」の力を借りて、何とか彼らを大陸から追い出すことに成功した。しかし、大陸の者たちが失ったものはあまりにも大きかった——。という、伝説。

この伝説も、「四大精霊」についても、ちょっと前までは興味のある人は知っているくらいの単なる言い伝えに過ぎなかった。しかし、今のパファック大陸の状況は、二千年前の伝説と、あまりに酷似していた。

*

「バート様。……ちょっと」

ひと通り話が終わったところで、兵士がバートを手招いた。バートはサラと顔を見合わせてから、うなずいて兵士に歩み寄った。

「何だ？ サラの前では言えないことか？」

「……はい。本当のことなら王女にも王にも報告するべきことなのでしょうけれど……、私たちまだ、確信が持てなくて」

「サラに関係することか？ それともピアン王に？」

「いえ。バート様に関係することです」

「俺に？」

兵士の口調、表情から、バートは何となくぴんときてしまった。

「……父親に関することか？」

「ご察しのとおりで」

「まさか、父親が見つかったと言うのか？」

言いながら四年前の父親の顔を思い浮かべ、バートの声はわずかに震えてしまった。我ながら情けないと思う。

「私は見ていません。ですが、『見た』という噂を、聞きました」

「父親を……クラヴィスをか？」

兵士はうなずいた。

「どこで？」

「サウスポートです。クラヴィス將軍は……」

兵士は言い辛そうに、いったん言葉を切った。

「背に赤い翼を持ち、サウスポートの上空を飛び、他の異形の者たちと共に、サウスポート襲撃に加

わっていたと——」

「な……」

バートは呻いた。それは、いったいどういふことなのか——。答えが浮かばない。

「それは、本当に父親なのか？」

兵士は首を振った。

「……わかりません。しかし……」

「……………」

バートは唇を噛みしめて右の拳を握りしめた。四年前の父親の顔を思い浮かべる。今でもはつきりと思い浮かべることができる。

「……報告、ありがとう」

バートは短く呟くと、足早に歩き始めた。

「バート様、どちらへ？」

慌てたような兵士の声が背中から聞こえてきたが、バートは歩みを止めなかった。心臓が大きく音を立てている。

（行ってみるしか、ねーな）

サウスポートに行つて、自分の目で確かめてみるしかない。バートはそう決めて、まっすぐに乗用陸鳥《ヴェクタ》乗場に向かった。今首都を発てば、暗くなる前にはサウスポートに着けるだろう。それにサウスポートには知り合いが住んでいる。以前はピアン首都のバートの家の近所に住んでいたのだが、数年前、サウスポートに移り住んだ一家がいた。その一家とバートの一家は家族ぐるみでの付き合いがあつた。サウスポートが襲撃されたというのなら、彼らの安否も気がかりだった。

（2）

「来た……か」

窓の外に目をやって、エニイルはつぶやいた。近所の者たちは皆逃げたと思う。エニイルと彼の妻、三人の子供たちは未だ、家の中から外の様子をうかがっていた。時折誰かの悲鳴が聞こえてくる。複数の足音も。ドン、という衝撃音も。

「いい加減、この家が燃える前に、何とかしなくちゃなあ」

エニイルは家の中を振り返った。彼の妻と三人の子供たちがじつとこちらを見つめていた。

『彼』が来たのは、あまりにも突然だった。彼が来たことを、エニイルはすぐに感知した。ということは、彼にも自分の居場所、少なくともすぐ近く、ここサウスポートに自分がいることはわかっているはずなのだ。『彼』とエニイルは、初めて会ったときからそうだった。何故なのか、それが何を意味するのかは、少なくともエニイルにはわからないのだが。

（まさか彼らは、禁断のあの技術を……）

「お父さん！」

娘の鋭い声にエニイルははっと我に返った。

「そろそろ話してよ。私たちが、これから何をすれば良いのか。覚悟はできてるし、お父さんの言うことなら何だつてするから」

ね、とエニールの長女は弟二人に目をやった。二人とも真剣な眼差しで大きくうなづく。

「ありがとう」エニールは言った。

「かなり、無理言うことになるけど、」

「全然オツケー」

エニールの娘は不適に微笑《わら》った。

*

リイルはエニールの次男で、三人姉弟《きょうだい》の末っ子だった。年齢は十七歳で、バートと同じ年。バートのことは小さい頃から良く知っていた。以前、ピアン首都に住んでいたとき、良

く一緒に遊んだものだった。その後、リイルの家族はここサウスポートに移り住んだのだが、年に何度かは、首都のバートの家に遊びに行っているし、バートたちがこちらに遊びに来ることもあった。リイルの両親とバートの両親は、昔からの知り合いなのだそうだ。

リイルは姉エルザと一緒にサウスポートの街道を駆けていた。父と母と兄は一緒にはいない。街道脇の民家のほとんどは敵に破壊され半壊し、煙を上げているものもあった。道端には血まみれの小動物が横たわっていたりしたが、リイルは目をそらしながら姉の背を追いかけて駆けていた。今は姉の他に人影は見えなかった。

「調子はどう？ 万全？」

走りながら姉が声をかけてきた。姉は息ひとつ切らさずに駆けている。

「うん、わりと」リイルは答えた。

「敵が現れたら頼りにしてっからね。任せたわよ」

「でも姉貴のほうが強いじゃん」

「あんたもそこそこでしょ」とエルザは言う。

「ピアンの將軍の息子と互角に渡り合えるんだから」

「……まーね」

リイルは水の精霊を扱うことが出来る。その攻撃力は大人をも凌ぐほどだった。首都にいた頃、バートとは良く「決闘ごっこ」をやっていた。どちらかが適当に「果たし状」を書いて相手の家に投げ込み、空き地で手合わせをおこなう。バートとの決闘の勝敗の結果は五分五分。最初はリイルのほうが強かった。昔のバートはいわゆる「精霊音痴」で、リイルが水の精霊を自在に操ることができる一方、バートは炎の精霊を召喚できたとしても一瞬で、ましてや思い通りに操ることなんて全くできなかった。（それがいつの間にか「精霊剣」なんて器用なこと覚えちゃってさ）

親友が強くなることは嬉しいのだが、自分が負けることはちよつと悔しい。自分は負けず嫌いなのもかもしれない。

空き地で決闘をしていると、時々見回りのピアノ兵士たちに「何やってるんですかつ」と止めに

入られた。「死んだらどうするんですかっ」と言われたこともあった。それほど凄まじい試合を繰り広げていたらしい……。そういえば決闘で大怪我して、もしくはバートに大怪我をさせて、姉エルザに本気で殴られたこともあった。

(3)

バートとサラはそれぞれの乗用陸鳥《ヴェクタ》で森の中を進んでいた。この森を抜ければサウスポートはすぐそこだ。日が落ちるまでにはまだ少し時間がありそうで、暗くなる前にサウスポートに辿り着けそうだった。

森に入る前の街道や森の中で、バートとサラは何組かの集団とすれ違った。サウスポートを脱出してきた人たちで、ピアノ首都に向かうところだと言っていた。バートは彼らにリイルの一家の行方について尋ねた。そして、父親——元ピアノの将軍、クラヴィスを見なかったかということも。

父親については何の手がかりも聞き出せなかったが、森の中で出会ったある女性はこんなことを言った。

「あなた達の友達かどうかはわからないけれど……、茶色の髪であなた達くらいの年齢の男の子なら、見たわ」

「どこでだ？ そいつは今、どこにいるかわかるか？」

バートは尋ねる。

「その子も私たちと一緒に首都に向かうところだったの」

女性はそのままで言うのと、うつむいた。

「それで、この森に入ったところで、敵に見つかって……。そしたらその子がね、私たちに先に逃げろって行って、ひとりで——」

バートとサラは顔を見合わせた。

「ごめんなさいね……」女性は声を落とす。

「いや、教えてくれてありがとう。そいつが俺が探してるやつかどうかはわかんねーけど」

「あと、その子、こんなことも言ってたわ。『やつらの狙いは俺だから』って」

「……?」

バートとサラは再び顔を見合わせた。

女性に礼を言つて、バートとサラは再び乗用陸鳥《ヴェクタ》を走らせた。

「心配ね……リイルちゃん」

サラがバートに話しかけてきた。

「もしその子がリイルちゃんだったとしたら——でも、敵に狙われているって、どういふことなのかしら」

「さあ。何かやらかしたんじゃないの、あいつ」

「……………」

「俺はあんま心配はしてねーんだけどな、実は」

バートは言つてやった。サラがあまりにも心配そうな顔をしていたからだ。

「あいつがそう簡単にくたばるとは思えねーし」

サラはリイルのことを何故かちゃん付けで呼ぶ。バートとサラが幼なじみで、バートとリイルが親友同士だったので、バートとリイルとサラの三人で良く遊んだものだった。バートは最初、サラが大真面目に「リイルちゃん」と呼ぶのを聞いたびに吹き出していたものだったが、今ではもうすっかり慣れてしまった。リイルも普通にそれを受け入れているように見えたので、別に良いかと思つてゐる。

*

「痛いっ！ 離してよ！ 何てことするのよっ！」

エルザは叫んでいた。身体の後ろに回された両手首に縄が食い込んでひどく痛かった。

幸い、『敵』はそれ以上エルザに危害を加えるつもりは無いようだった。エルザは騒ぐのを止め、『敵』を睨み付け、ふうと息をついた。

「……あの子追ったって無駄よ」

エルザは言ってやった。

「何も持っていないし、何も知らないもの」

「貴女の、弟ですか？」

『敵』はやけに丁寧な口調で、エルザの理解できる言葉で話しかけてきた。『敵』は、背中に赤い翼を生やしている以外は『人間』に見えた。人間が着るような軍服を着込み、腰に剣を挿している。彼は赤い髪を背中まで真っ直ぐに伸ばし、エルザの父と同じように眼鏡をかけていた。視力が弱いのだろうか。

エルザを捕らえている『敵』は、ピアン王国で言うなら將軍、というよりは参謀に見えた。武術はあまり得意ではなさそうだった。

「そうよ。私の弟よ。私に似て可愛いでしょう。ちょっと生意気だけど」

「追いなさい」

男は傍らに控えていた数人の『部下』たちにそう命じた。彼らは一斉に走り出した。

「……まっ、良いけどね。無駄なことを」

「さあ、どうだか」男は苦笑した。

「だって、長女でしつかり者の私ならともかくよ。お気楽のん気な末弟『おとうと』に大切なもの預けるように見える？　うちの父さん」

くくっ、と男は笑い声をもらした。

「良く喋りますね。この状況で」

「……良いじゃない別に」

「面白い娘だ」

男はエルザを見つめて眼鏡の奥で目を細めた。

「私の名はアビエス」

と、男は名乗ってから、

「どうです？ 私たちの仲間になりませんか？」

「……………」

エルザは少なからず驚いてアビエスを見返した。

「……それって。貴方たちに手を貸せってこと？」

「ええ」

「嫌だって言ったら？」

「貴女は死ぬことになります。今、この場で」

アビエスは表情ひとつ変えずにそう言った。

殺せるものなら殺してみれば？と言い返そうとしてエルザは言葉を止めた。そう言ってしまうのは簡単だ。でも――。

「……………」

エルザは数秒間考えて答えを出した。そしてアビエスに告げた。

*

森の中でリイルは木に片腕をついて呼吸を整えていた。激しい動悸が全身を駆け巡っている。呼吸は浅く早く、無意味に繰り返される。額や背中に冷たい汗をかいている。

（姉貴――）

街中で姉エルザは敵に捕らわれてしまった。リイルを逃がすために。リイルは逃げた。サウスポートを出て森を駆けた。追ってきた数人の敵兵は、『水の精霊』を召喚して倒した。

（姉貴……ごめん）

逃げなさい！という姉の声が耳に残っている。……助けられなかった。

「くそ……っ」

「部下たちは全員倒しましたか」

男の声にリイルははっと顔を上げた。赤い長い髪の方がゆっくりと歩み寄ってくるところだった。背中には赤い翼。——エルザを捕らえた男だ。後方には、さらに四名の敵兵を従えている。

「しかし、精霊の力の使いすぎで、だいぶ疲労しているようですね。もう余力は無いでしょう」

「……姉貴は……」

リイルの問いに男は答えず、眼鏡の奥でにやりと笑った。歩みは止めない。リイルは身構える。

「リイルちゃんっ！」

少女の悲鳴に似た声が後方から聞こえた。

「……っ！」

リイルは思わず振り返った。二匹の乗用陸鳥《ヴェクタ》が見えた。黒髪の少年と、金髪の少女が乗っている。二人は同時に乗用陸鳥《ヴェクタ》から飛び降りてこちらに駆けてきた。

「バート……。サラ……」

リイルは二人の名を呟いた。

*

（こいつらが……異形の……）

バートはリイルに近付いていた男をじっと見つめた。赤い髪。そして、背中には確かに、赤い翼。赤い翼以外は人間と言っても通用する風貌だった。

「大丈夫っリイルちゃん。怪我なんかしてない？」

サラがリイルに尋ねる。サラは大地の精霊を扱える。彼女の精霊は主に傷を癒すことに使役される。精霊には攻撃型、治癒型とタイプがあるとされていて、リイルの精霊タイプは典型的な攻撃型、サラの精霊タイプは治癒型だった。両方扱える者もいると聞く。

「ありがとうサラ。とりあえず怪我はしてないから大丈夫」

とリイルは言ったが、話すだけでも辛そうな感じだった。

「積もる話はあるけど、お前は少し下がって休んでろ」

バートはリイルに言つて、リイルと男の間に割って入った。男は興味深そうにバートを見つめた。

「貴方は？」

「こいつの友人」バートは言う。

「そういうてめーは誰だ？」

「私はアビエス。ガルディアの将です」

「ガルディア……？」

「貴方たちがサウスポートを襲ったの？」

サラがバートの隣に並んで立つて尋ねた。

「はい」

「……そうか」

バートは呟いて、剣を抜いた。アビエスは微笑んだ。

アビエスの後ろに控えていた敵兵たちが奇声を発しながら襲いかかってきた。抜き身の剣を手にしている。赤い翼に、赤く短い頭髮。土色の肌。吊り上がった両眼。いびつな鼻。尖った耳。口から覗く牙。こいつらの容姿はあまり『人間』には見えない。

バートは斬りかかってくる剣をかわし、自らの剣を繰り出した。斬りつけられた敵が叫び声を上げて地面に倒れた。

「バートっ、危ない！」

別の角度から襲いかかってきた異形の敵に、サラが拳を振るった。四体の異形の敵が地面に倒れ動かなくなるまで、そう時間はかからなかった。

「ほう。貴方たちも強いですね。子供三人とはいえ、侮れない」

アビエスは感心したように目を細めた。

「俺は……」

バートはアビエスを見据えた。

「あんたに聞きたいことがある。俺の父親——クラヴィスのことだ」

「……クラヴィス、」

アビエスはその名を繰り返した。アビエスの表情はバートを見つめたまま、何も語らない。

「知ってるのか？」

「さあ」

「てめえっ！ 真面目に答えやがれっ！」

バートは叫んで、アビエスに斬りかかった。アビエスはふわりと宙に舞い上がる。

「今は退きましよう。……また、会うことになるかもしれませんが。そう遠くないうちに」

「待て！ フザケるな！」

バートは見上げて叫んだ。アビエスは構わず、翼で飛んでサウスポートの方角へと去っていきこ

とする。バートはアビエスを追って駆け出そうとした。

「バートっ！」

リイルの叫び声が聞こえて、バートは足を止めて振り返った。

「追ったって……無駄だ……。もう、サウスポートは……完全に……やつらの、」

リイルは言って、言葉を詰まらせる。

「リイル……」

バートはリイルに歩み寄った。

「話すよ、色々なこと。……できれば座って話したいけど」

リイルは言った。

(4)

夜の闇の中を二匹の乗用陸鳥《ヴェクタ》が駆けていた。それぞれのヴェクタの前方に取り付けてある灯りが辛うじて狭い周囲を照らしている。空は雲に覆われているのだろうか。天は随分と暗い。

バートとサラとリイルはお互いの事情を語り合い、「とりあえず、ピアン首都に帰ろう」という結論に至った。あのままサウスポート周辺に留まっていたとしても、バートたち三人にできることは何もない。それに、もし王女に何かあったら……、というのが理由だった。サラはバートとリイルがピアン首都に帰るのなら自分も帰ることに異論はないと言い、リイルもサラのことを気にしてかすぐにでも帰るべきだと言った。バートは……、迷っていた。

バートが方位針《コンパス》を見ながら乗用陸鳥《ヴェクタ》の手綱を握り、リイルはバートと同じヴェクタに乗ってバートの後ろですやすやと寝息を立てていた。こいつの特技はいつでもどこでも寝られること。昼過ぎまで寝ていられること。とバートは思う。

「サラ。疲れてないか？」

バートは隣を走るヴェクタに声をかけた。

「大丈夫よ。休みなしで行けると思うわ」

サラの答えが返ってくる。

「疲れたら言えよ」

「ええ」

順調にヴェクタを走らせれば、首都に着くのは夜半過ぎくらいになるだろうか。バートはなるべくなら野宿はせずに首都についてから自分のベッドで眠りたかった。しかし……、自分のベッドに入ったところで、こんな気持ちを抱えたまま、眠りにつくことができるのだろうか。

*

少し前まで、バートとリイルとサラは二匹の乗用陸鳥《ヴェクタ》をゆっくりと進めながら語り合っていた。

「エルザねーちゃんが捕まったあ?..!」

バートは思わず声を上げていた。リイルの姉エルザは、何せバートとリイルの二人がかりでも敵わない相手なのだ。色々な意味で。

リイルはうなずき、黙り込んだ。サラが遠慮がちに尋ねる。

「それで、リイルちゃんのお父さまたちは……」

「……わからない。行方知れずってこと。姉貴と同じように敵に捕まったのかもしれないし、上手く逃げ延びているのかもしれない」

「そ……っか」

バートはリイルの父も母も兄も姉も良く知っていた。彼らの安否が全くわからないということは、リイルとは無事に再会できたものの、素直に喜べない。

「とりあえず、さ。首都に行ったら……」

「俺ん家に来いよ」

すぐにバートは言った。リイルはありがとう、と礼を言う。

「首都で、しばらく待ってみることにする。父さんも母さんも兄貴も、俺と同じこと考えると思うから」
「そうね。それが良いわ」

とサラも言う。

「大丈夫だって。お前の父ちゃんも母ちゃんも兄ちゃんも、絶対無事だって！」

バートは力強く言った。バートに背中を叩かれてリイルはようやく少し笑って、うなずいた。

「でも、どうしてリイルちゃんの一家が敵に狙われたのかしら？」とサラ。

「んー」

リイルは上を見上げて考え込んだ。

「実は、俺も良くわかってないんだ。俺末っ子だから、肝心なことは何ひとつ教えてもらってなくて」

「そうなのか……」

「うちに代々伝わる家宝かなんかあって、」とリイルは言う。

「それが敵さんに奪われると、すっごいやばいらしいんだ。『大陸全土の存亡に関わる』とか父さんが言ってた。それで本物の家宝と、ダミーの家宝を父さんと母さんと兄貴と姉貴が持って、みんなでバラバラに逃げたってわけ」

「ふうん。なんか大変なんだな……。お前の一家」

「リイルちゃんは持っていないの？ その家宝」

「俺は何も持っていない。俺の存在自体がダミーってことなんじゃないかな。……あつ、バートとサラだから話したけど、このこと誰にも内緒で」

「了解」

「ところで、どうしてバートはサウスポートへ？」

とリイルが尋ねてきた。

「そりゃもちろん、お前の一家のことが心配になって、」

「それだけ？」とリイル。

「さっき、バート、父親さんの名前を出してたけど……」

「……………」

バートはため息をついた。サラにも知られていることだ。そのうち、ピアン王も知ることになるかもしれない。バートはリイルにも話すことにした。

「お前は見なかったか？ 俺の父親」

バートは尋ねてみた。リイルは黙って首を振った。

「そうか」

「……………」

そこで、会話は途切れた。三人はしばらくの間、無言で静かな闇の中を乗用陸鳥《ヴェクタ》に揺られて進んでいた。

バートは迷っていた。このまま首都に帰ってしまつて良いのだろうか。さっきのアビエスとかいう赤い翼を持つ者。あいつを追いかけて、父親のことを問い詰めたかった。でも、リイルは「無駄だ」

と言った。サウスポートは、異形の者たちに完全に占拠されてしまったと。

（父親——。俺は……）

バートは唇を嚙んで乗用陸鳥《ヴェクタ》の手綱を強く握り締めた。

旅の始まり

(1)

「本当に一人で大丈夫なんですか？」

と、リステイルが尋ねてくる。いつも通りの穏やかな口調で、キリアの心確かめるように。

「うん、大丈夫よ、一人で」とキリアは答える。

「だからリステイルは、おじいちゃんのことお願い」

「わかりました」

髪の長い青年はしっかりとうなずいた。

キリアは一人「塔」を出て、国境の向こうの旅に出る。南の隣国のピアン首都までの旅は完全な一人旅となる。初めての一人での長旅。不安よりも、

(ずっと塔を出たいって思ってた)

キリアは乗用陸鳥《ヴェクタ》の背で大きく伸びをする。今回の旅はかなりの長旅になるだろう。空は青くて広い。キグリスの大草原を南に街道が延びている。振り返れば小さく遠ざかっていく塔が見える……。

(2)

バートの母はピアン首都で『SHINING OASIS 《シャイニング・オアシス》』という名の小ぢんまりとした食堂を営んでいる。ここは昼間は食堂だが、夕方を過ぎると酒も飲めるようになる。二階には二人部屋が三つあり、宿泊もできる。交代制だが一応、入浴もできる。昼にランチを食べに来る人、夜に酒を飲みに来る人、そのまま入浴して泊まっていく人。客はそこそこ多く、特に昼時と夜は賑わっていた。

サウスポートを追われ、家族ともはぐれたリイルは、バートの家で住み込みで働くことになった。バートと母は「別に働かなくても」と言っただが、リイルは住まわせてもらうからには働きますと言って譲らなかった。

「すみません、宿泊部屋ひとつ占領しちゃって」

「良いのよ。私とリイル君の仲でしょ。遠慮なんかしないで。それに昼時は忙しいから、正直、手伝ってもらえるのはすごく助かるのよ。コイツは手伝いサボってばっかで何の役にも立ちやあしないし」

バートの母ユーリアは息子を横目で見ながら言った。だってめんどくせーんだもん、とバートが良くわからない言い訳をする。

リイルがバートの家で寝泊りするようになってから数日後。一人の女性が『SHINING O A S I S』を訪れた。開店直後で、客はまだ一人も居なかった。

「こんにちは」と言って、女性は食堂の扉を開けて中に入ってきた。

「いらっしやい」

厨房で準備をしていたバートの母が明るく声をかけた。バートとリイルは慌てて水とおしぼりを持って出て行った。

女性はバートたちと同じくらいか少し上の年齢に見えた。ストレートの髪を肩まで伸ばしている。見慣れない顔だった。

「とりあえず空いている席へどうぞ」

リイルは笑顔で女性に言った。こいつ接客業に向いてるな、とバートは思った。バートは接客が下手で、母に「少しはリイル君を見習いなさい」とまで言われていた。

「あ、ごめんなさい。ええと、ちょっとお聞きしたいことがあります」

女性は席に着くそぶりは見せずに言った。

「なんだ、客じゃねーのかよ」

バートは思わず声に出してしまった。むっとしたような女性と目が合う。まーまー、とリイルがバ

トをなだめた。

「よろしければ座ってお水でも。せつかく持ってきてやったし」

「そうね。……ありがと」

女性は手近な椅子に腰かけると、リイルから水を受け取って微笑んだ。

「で、聞きたいことってのはね、」

水を一口飲んで、女性は口を開いた。

「私、人を探してるの。……『エニイル』っていう名の男性なんだけど」

「！」

バートとリイルはその名を聞いて目をみはった。エニイル——行方不明の、リイルの父の名だ。

「おいリイ……」

「『エニイル』さんを探して、ここに来たんですか？ 何かあてでもあつて？」

バートを制して、リイルが口を開いた。バートは会話はリイルに任せることにした。

「ん、」

女性は小さく頷いた。

「ピアン首都《ここ》で色々聞いて回って。……あ、元々はサウスポートに住んでいたんでしょう。でも、サウスポートって、あんなことになっちゃったから」

「……………」

「エニイルさんが来るとしたらここだって、噂で聞いてね。……その様子だと良く知ってるんですよ、エニイルさんのこと」

「知ってますけど……」とリイル。

「貴女は、どなたなんですか？ 何故彼を探しているんですか？」

「あ、申し遅れちゃったけど、」と女性は言った。

「私の名前はキリア。キグリスから来たの。エニイルさんを探しているのは、とあるお方の命《めい》を受けてね。決して怪しい者じゃないから」

「キギリス?..!」

バートは声を上げた。キギリス王国は、ピアン首都の北の山を越えたところ、大陸の中央に位置する王国で、ピアン王国とはあまり仲が良くなかった。数年前、国境付近で小競り合いをやらかしたこともある。

「キギリスで悪い?..」

女性——キリアは強気に言い返してきた。

「今、ピアンだキギリスだって言ってる場合じゃないでしょ。そのこと一番良くわかってるの、ピアンの人たちなんじゃない?..」

「まーまーまー」

リイルがバートとキリアの間に割って入ってきた。そしてキリアを見て言う。

「エニイルは俺の父です。——さつき、『とあるお方の命《めい》』って言いましたね?..」

「ああ……貴方、息子さんだったのね」

『とあるお方』って誰ですか？ 父さんの知り合い？」

「……それは……、ええと……」

キリアは口ごもった。

「お互い隠し事は止めませんか？ あ、場所変えて話そうか」

「そうね。それが良いわね」

いつの間にかバートの母が背後に立っていた。

「二階に行ってきたら？ あとで差し入れ持って行ってあげるわよ」

「すみません、ユーリアさん。行こう、バートも」

リイルはバートとキリアをうながして、二階へと向かった。

*

三人は階段を上り、二階の宿泊部屋のひとつに入って、扉を閉めた。部屋の中にはベッドが二つあり、間に小さな机が置いてある。バートとリイルが片側のベッドに腰かけ、キリアはもうひとつのベッドに腰かけて机を挟んで二人と向かい合った。

「どっちから話すべきかなー」

と、リイルは口を開いた。

「貴女が俺の父さんのことをどこまで知っているかによるんだけど、父さんの知り合い？」

「キリアで良いわよ。私はごめん、知らないの。でもおじいちゃんは良く知っているみたいだった」

「おじいちゃん？」

「キギリスの大賢者、キルディアスが私の祖父なの。……ピアンの人なら知らないか」

「キギリスの大賢者……」

バートはつぶやいて、正直に知らない、と答えた。

「俺は、噂程度には」とリイル。

「おじいちゃん——大賢者キルディアスに頼まれて、ここに来たってわけ」

とキリアは言う。

「エニイルさんの安否と所在を確かめてきて欲しいって。私が塔を出たときには、もうサウスポートの噂はキギリスまで届いていたんだけど……」

「父さんの行方は……わからないんだ」

とリイルは言った。リイルは自分の家族がバラバラになったこと、姉が敵に捕まったこと、もしかしたら家族に会えるかも知れないと思ってここにいるが、未だ誰にも会えないことをキリアに伝えた。

「そう……」キリアは残念そうに言った。

「貴方も、大変ね……」

バートの母ユーリアが三人分の飲み物と焼き菓子を持って部屋に入ってきた。三人は焼き菓子を食べ、飲み物を飲んで、ふうと一息ついた。

「さーと。どうしよっかな」

と言いながら、キリアは立ち上がった。

「お仕事中、突然ごめんね。私そろそろ行かなくちゃ」

「どうすんだお前、これから」バートは尋ねてみる。

「エニールさんの件は、正直、どうしようかなってところ」とキリア。

「まあ、所在不明ならそう報告するしかないんだけどね。数日経ったらまたお邪魔させてもらうかも」
「そっか」

「……それと。私が首都に来たの、もうひとつ理由があるのよ」

そう言ってキリアは、何故かはあ、とため息をつく。

「？」

「ううん、なんでもない。時間があれば食堂でお昼食べて行きたいところなんだけど、ごめん、もう行かなくちゃ」

「気にしないで良いよ。また食べに来てくれれば」とリイル。

「ありがとう。お父さん、見つかるの良いわね」

キリアは言った。

「私も『命《めい》』のこともあるし、こっちはこっちでエニイルさん探すから。何か情報あったら伝えるわね」

「それはすごく助かるよ」

リイルは礼を言った。

(3)

その日の夜。バートは自分の部屋の灯りを消してベッドに入った。バートの部屋は二階の一角にある。元々は宿泊部屋だったらしいが、ここはいつの間にかバートの部屋ということになっていた。

つくりは二人用の宿泊部屋と同じだが、ベッドは一つしかなく、もう一つのベッドの代わりに大きなテーブルが置いてある。ちなみに、バートの父母の寝室は一階にある。

コンコン。最初は空耳かと思った。少し後、再びはつきりと窓をノックする音が聞こえた。バートは起き上がって灯りをつけ、窓の外を見てぎょつとした。

「な、なんでお前、こんな時間に……」

バートは慌てて窓を開けた。そこには金髪の少女、ピアン王国王女サラが「やっほー」と笑顔で手を振っていた。

バートが開けた窓から、サラはお邪魔します、とつぶやいて部屋の中に入ってきた。ここは二階である……。バートはため息をついた。どうやって上ってきたんだ、とは聞かない。バートの部屋の窓の外はベランダになっていて、そこから屋根、塀とつたって通りに下りられるのだ。運動神経の良い者なら、その逆もわけなくできる。サラは小さい頃から良く王宮を抜け出してはバートの部屋に侵入してきたので、そのことに関してはバートは驚かなくなっていた。

「どうしたんだよサラ、こんな夜中に」

午前中は突然変なキグリス女が来たし、今日は千客万来だな、とバートは思う。

「ねえバート」サラはバートを見て言った。

「伝説の大精霊……『炎』『ホノオ』に会いに行かない?」

「……はああ?」

バートはその場でこけそうになった。真夜中に一国の王女が民家に乗り込んで来て何を言い出すのかと思えば……。

*

この世界には「精霊」が存在する。自然界に存在する不思議な「気」のことである。精霊には土・火・風・水の四種類がある。人『ヒト』は個人差はあれど、これらの精霊を自由に操ることができる。

精霊の力は物を破壊する力にもなり、傷を癒す力にもなる。

ただし、人《ヒト》が操れる精霊は四種類のうち一種類のみである。火に属する者は火の精霊、水に属する者は水の精霊を扱える。その属性は、その者が生まれた季節によって決まっていた。

そして、精霊たちを統べる「大精霊」の存在が、古くから信じられていた。火の精霊たちを統べるのは、大精霊《炎》《ホノオ》。水の精霊たちを統べるのは、大精霊《流水》《ルスイ》。風の精霊たちを統べるのは、大精霊《風雅》《フウガ》。土の精霊たちを統べるのは、大精霊《陸土》《リクト》。四体の大精霊は、普段は人知れずどこかでひっそりと眠りに付いている、と言われている。そして、二千年前、この大陸が危機に陥ったときには、人間たちに力を貸し与えた。そして今は再び長い眠りに付いている――。

「……で、炎《ホノオ》ってのは一体どこにいるんだ」
バートは一応聞いてみた。

「知らないのバート。有名な伝説じゃない。ピアンとキグリスの国境、ピラキア山脈よ」

「へえ。そんな伝説があったのか。てか、国境つつたら随分遠いな」

国境に辿り着くまでには、首都を出てから乗用陸鳥《ヴェクタ》を走らせて数日はかかる。

「詳しい話は行きながらにしましょ」とサラは言った。

「さあ、早く準備すませちゃってね」

「……っおいっ！」バートは思わず大声を上げた。

「まさかお前、今から行く気満々なのか？」

「もちろんよ」サラは笑顔で答える。

「オイ、いくらなんでも冗談、」

「本当のこと言うかね……」

サラは急に声のトーンを落とした。

「……あたし、命を狙われてるの」

「な、何っ?!」

バートは声をひそめて驚いた。

「どういふことなんだよサラ……！」

「だから、王宮を抜け出してここまで逃げてきて……できるだけ早く、遠くに逃げなくちゃならないの。お願いバート。あたしもう頼れるのが、バートしかいなくて」

「何てこった……」バートはうめいた。

「そうならそうと早く言えってんだ！ 待ってろっ、今から準備すつから……」

「ごめんね……巻き込んだじゃって」

「何を今更」

バートは短く言い捨てると、慌てて外に出る支度を始めた。突然のことだが、もしかしたら数日かかる旅になるかもしれないので、それなりの準備をしなければならない。

「そうだ、リイルも連れてくか」

バートはふと思いついて言った。リイルはバートの隣の部屋でぐっすり眠っているはずだ。

「そうね、リイルちゃんもいてくれたほうが心強いわ」

「いざって時のために、人数は多いほうが良いよな」

と言いながら、バートは廊下に出てリイルの部屋の扉を開け放つ。

「おいリイル——」

ぐっすりと眠るリイルを叩き起こそうとして——バートは止めた。リイルがここに居るのは、リイルの父母や兄がここに来るからかもしれない、それをリイルは待っているのではなかったか。わざわざ、王女の命を狙う者から逃げるといふ、危険な逃避行の旅にリイルを連れ出す必要はない。

「サラ、やっぱりリイルは寝かしておくことにした」

部屋に戻ってバートはサラに言った。

「あいつ、夜だめなんだよな。起こしても起きねーし。はつきり言って足手まといになるだけだし」

「そうなの……。残念ね」

「俺たちが急にいなくなつて心配するといけねーから、書き置きだけ残しておくか」

バートの母ならいくらでも心配させておけば良いが、リイルについてはそうもいかない。バートは戸棚をあさってペンとメモ用紙を取り出すと、短い伝言を書いて、そのへんの封筒に入れた。封筒の表には「果たし状」と書かれていたが気にしている時間はない。バートはその封筒をリイルの部屋に投げ込んだ。

(4)

扉を叩く音がする――。リイルははっと目を開けた。窓から差し込む光で部屋の中は明るかった。太陽がいつもより高い位置にあるような気がする。

「リイル君、起きてる？ いーい？ 入るわよ」

バートの母ユーリアの声が聞こえてきた。はい、と返事をして、ふとベッドの脇に落ちている封筒が目にとまった。

扉が開けられてユーリアが入ってきた。

「うちのバカ息子知らない？」とユーリアが尋ねてきた。

「いつまでたっても起きてこないから、どうしたのかと思ってアイツの部屋覗いてみたらいなくって」
「そういえば、今日は起こされなかったな……バートに」

リイルはここ数日ひとりで起きたためしかなかったな、と思い返していた。寝起きの悪いリイルを叩き起こすのはバートの役目だった。

「ええと、バートがいらないんですか？」

大あくびをしながら、リイルは床に落ちていた封筒を拾い上げた。「果たし状」の文字が目飛び込んでききよとした。

「?..?」

リイルは首を傾げながら封を開けた。

『リイルへ サラが命を狙われているらしい。二人でできるだけ遠くに逃げることにした。ついでに

大精靈 炎《ホノオ》にも会ってくる。バート』

*

リイルとユーリアは、一階の食堂で少し遅めの朝食をとっていた。

「じゃあ……、サラちゃんが命を狙われて、うちのバカと二人で逃亡中、ってことなの？」
と、ユーリア。

「どうやらそうみたいで……」

リイルはコーヒーを口にしながら答えた。

「心配だわ……サラちゃんが」

「……バートの心配はしないんですか」

「それにしても、『ついでに』以下の意味が良くわかんないわね。大精靈…… 炎《ホノオ》？」

ユーリアが書き置きを手に首を傾げた。

「炎《ホノオ》」ってピリア山脈でしたっけ。国境付近まで逃げるつもりだって意味なのかなあ」「随分遠くじゃない。いつ帰ってくるつもりなのかしら。……当分帰ってこないつもりなのかしら」「いつまでも二人で逃げ続けるわけには……。ってか、サラが狙われてるってどういうことなんだろう。それが解決すれば、帰って来るのでは」

「そうね。久しぶりに王宮行ってみようかしら。この書き置きだけじゃあねえ。何が起こってるのか、確認してこないと」

そうですね、とリイルがうなずいたとき、がたん、と音を立てて扉が開けられた。まだ開店時刻ではなく、扉には「準備中」の札がかかっているはずだった。扉の鍵は開いていたらしい。

「キリア？」

駆け込んできた女性を見てリイルは声を上げた。昨日もここに來ていたキリアだった。

「すみませんっ、ちょっと……」

キリアはずっと走ってきたらしく、息を切らせていた。ユーリアが水の入ったコップを持ってきてキリアに渡した。

「……聞きたいことが。サラ王女、ここに来てませんか……？」

「え……」

とだけつぶやいて、リイルは固まってしまった。

「他言無用の極秘情報なんだけど……サラ王女が……昨夜から行方不明で……」

「……？」

何故キリアがサラのことを知っているのだろう……。キリアは何者なのだろう、とリイルは考える。そういえばキリアは最初から色々あやしかった。まさかキリアが王女の命を狙う暗殺者……？とまでリイルが思ったとき、

「どうしよう……やっぱり悪いことしちゃった……。王女がいなくなっちゃったの、きつと、私の所為……」

キリアは言っ、コップに口をつけるとうつむいてしまった。その姿は本気で落ち込んでるよう、とてもキリアがサラの命を狙っている暗殺者のようには見えなかった。というか、そう信じたい。

「あ、詳しい話、聞かせてもらえませんか？」

リイルはキリアに言っ。今日はしばらく臨時休業ね、と言っ、ユーリアは扉の鍵をかけるために立ち上がった。

*

「私が首都に來たの、もうひとつ理由があるって言っただしょ」

と、キリアは語り始めた。キリアは二つの命を受けてピアン首都に來たのだという。

「ひとつがエニイルさんのこと。これは昨日話した通りね。で、もうひとつが、ピアン王女のことな

の。こっちはキギリス王の命でもあるの」

「ふうん。俺の父さんのことより、そっちの方が重要そうだね」

「まあね」キリアはうなずいた。

「キギリス王は、ピアンとの停戦を考えているの」

「へえ、ピアンとキギリスが停戦……、それ、良いね」

「うん。お互いにとって悪い話じゃないでしょ。だって、ねえ」

ピアン王国最南の港町が、『異世界から来た異形の者』たちに占拠されたという情報はキギリスにも伝わっていた。キギリス側でも、その出来事を二千年前の伝説になぞらえる者が多くいるという。

ピアンとしては、既にキギリスと小競り合いを続けている場合ではなくなっている。キギリスとしても、その敵の正体がわからない以上、大陸全土の脅威ともなり得る「彼ら」を撃破するため、ピアンと手を組んだほうが得策、というわけなのである。

「それで、キギリス王は、停戦の証《あかし》として、キギリス王子ロレーヌと、ピアン王女サラ様

を婚姻させようとしているわけ」

「それって……」

「そう。政略結婚、てやつね」とキリアは言った。

「その話を持ってきたのよ。……あんま気は進まなかったけど。あ、停戦同盟じゃなくて、政略結婚のほうね」

「うーん確かに、結婚ってのはねえ。一生のことだもの……」

ユーリアがつぶやく。

「……変なこと聞くけど、」リイルはキリアに言った。

「その話、本当のことだよな?」

「嘘言ってどうするのよ……。王宮行って確かめてきたら? あ、今のところ王女失踪の件は極秘情報ってことになってるけど……」

キリアはユーリアを見た。

「ごめんなさい、色々調べさせてもらっているんです。『SHINING OASIS』の女将『おかみ』さんが、ピアンの将、クラヴィスさんの妻だつてことも。なので、貴女だったら、きっと王宮で色々教えて貰えると思います」

「ユーリアさん」

「……そうね。私行ってくる」

ユーリアはそう言つて立ち上がった。

「王宮には行くかうと思つていたところだったのよ。リイル君、留守番よろしくね」

「はい」リイルはうなずいた。

キリアは色々しつかりしていそうだ、とリイルは思った。今の話が本当か嘘かどうかはバートの母が王宮に行けばわかることだ。問題は……『サラが命を狙われている』というバートからの伝言。これは、今回の政略結婚絡みのことなのだろうか。……それとも。

「そういえば」とキリアがリイルに尋ねてきた。

「昨日一緒にいた……バートだっけ。彼は今日はいないの？ 彼、クラヴィス將軍の息子さん、よね？」
「そうだけど。……ごめん突然話変わるけどキリア、サラはなんでもないくなっちゃったんだと思う？」
「そりゃあ……、私が持ってきたキギリス王子との政略結婚が嫌で……じゃないの？」
「これ、」

リイルはキリアにバートからの伝言を見せた。

「……どう、思う？」

「……………」

キリアはメモ用紙に書かれたバートの文字を凝視していた。

「ピアン王女が……命を狙われて……？ それは私、初耳ね」

「そうかー。まあ、この件についてもバートの母親さんが情報集めてきてくれると思うからそれを待つとして……」

「……なんで『ついでに大精霊 炎《ホノオ》』なのかしら。ここは突っ込むところで良いの？」

「たぶん」リイルは答えた。

*

しばらくして、バートの母ユーリアが『SHINING OASIS』に帰ってきた。

「やっぱりサラちゃんが行方不明になっちゃってるのは本当ね……みんな必死で街中探し回ってるわ」

とユーリアは言った。

「ユーリアさん、サラが命を狙われて……って件は？」

リイルは尋ねてみる。

「そういう話は聞かなかったわね」

「そうですか……」

リイルは重い口を開いた。

「……まさかとは、思いますけど」

「王女が首都から逃げ出すための口実だったりして……？」

と、キリアが続ける。

「断言はできないけどね」

「うう、もしそうだったとしたら……そこまでピアン王女追い詰めちゃったのね……私」

キリアはそう言って、がつくりと落ち込んだ。

「それでもし本当に王女に何かあったら……キギリスとピアンの国交回復は絶望的……おじいちゃんにもキギリス王にも怒られる……どんな顔してキギリスに帰ってのよ……」

「キリア、」リイルはキリアに声をかけた。

「サラ王女が、無事にピアンに戻れば良いんだよね？」

キリアはリイルを見てうなずく。

「俺、二人を探しに行きます」

と、リイルは言った。

「二人のこと心配だし、探しに行って、連れ戻してきます」

「でもリイル君、貴方ここで……」

とユーリアが言いかけると、

「良いんです。何となくですけど……俺の家族は、ここで待ってるだけじゃあ、会えないような気がするんです」

「……そう」

「私も一緒に行きます」とキリアも言った。

「どうせこのままじゃあキギリスには帰れないし」

「わかったわ。くれぐれも気をつけてね」とユーリアは言った。

「……まあリイル君たちなら、うちのバカ息子と違ってしっかりしてそうだから安心ね」

「ありがとうございます。……すぐに見つかると思いますけど」

「幸い、あてはあるからね」

キリアが言い、リイルはうなずいた。

「夜のうちに首都を出たってことよね……。半日弱遅れか。追いつくかな？」

「バートたちが『リンツ』で一晩宿泊……ってことになったら、希望はあるかな。その分こっちは強行軍になるけど」

「とにかく、私たちもすぐに出発しないとね」

とキリアは言った。

ひとつめの旅が、始まろうとしていた。